

Title	日々の業務で感じること : 第 13 回 ピア・スーパービジョン報告
Author(s)	田中, 光太郎
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.24-No.1, 2014.9 : 25-26
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5143
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

第13回 ピア・スーパービジョン 報告

〈日々の業務で感じること〉

今回のピア・スーパービジョンでは、現在の仕事内容の紹介や業務の中で意識していること、困難なこと、課題等を、発表やシンポジウムを通して話させていただいた。発表をしたことで、自身の振り返りを始め、仕事の良いことや今後に向けた展望が改めて見えてきた。

私は、大学卒業後、主に精神障害者を対象とした障害者生活支援センターに勤めている。4人に1人が一生のうちになにかの精神障害をわずらう、とされている現代で、広く精神保健、精神障害に関する正しい知識や理解を普及させたい、と思いのもと現在に至っている。入職して3年目が終わろうとしている中、このような貴重な機会をいただき感謝の気持ちでいっぱいである。私の職場では、相談支援事業と地域活動支援事業を行っている。現在の主な業務内容は、面接、訪問、同行支援、退院支援、サービス調整等を行っており、様々な環境や立場に置かれている方々の多様なニーズに

対応できるよう、各関係機関と連携を取りながら個々の支援にあたっている。発表の際は、さらに業務内容を絞り、いくつかの事例を交えながら地域移行支援(退院支援)の説明や支援を通しての思いや課題等を発表した。

日々の業務をこなす中で心がけていることは、一人で抱えない、ことである。個別のケースを始め、その他の業務においても同様である。適宜、ではなく、定期的な報告や情報共有をすることにより、自分だけではなく、他の職員にもタイムリーに利用者のことを知っておいてもらうことが出来る。それにより、困難な事態になった際の相談も速やかにでき、なにより自分一人ではなく、職場全体で検討及び対応が出来るようになるからである。

「ほうれんそう」、福祉に限らず社会人として常識のことではあるが、現場では 実際にそれが出来ていない、出来ないような環境もある、という声を聞く。しかし、“早めに声をあげる、手をあげる”ことが、結果的には個別における支援の充実や可能性の広がり、さらには一人で抱えない、ことに繋がってくるのではないだろうか。仕事をする上で困難と感じることは、経験年数が少ないことからくる視野の狭さや現場における知識不足の面である。上記のように一人で抱えないよう工夫をしているものの、やはり自身の能力の低さにもどかしさを感じる場面は支援の中で多々ある。これに

関しては、今後も支援を行っていく中で経験を積んでいきたいと思う。今後の展望としては、利用者に寄り添いより良い支援をしていくために、知識や広い視野を身に付け、多様なニーズに対応できるような支援者を目指していきたい。

(文責：田中 光太郎 [たなか・こうたろう] 障害者生活支援センター勤務、精神保健福祉士、2010年度聖学院大学人間福祉学科卒業)



会場風景